

アルベドとボトルシップ

木綿絹ごし

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

アニメエンディングテーマを意識してみました。

※注意！ 間接的な表現を使っていますが、猟奇的な場面が含まれます。ご注意ください。

目次

アルベドとボトルシップ

アルベドは第九階層の自室にて嘆息を吐いていた。肺に溜まった空気を淀んだ気持ちとともに吐き出し、しかし一度汚れてしまった感情までは洗い流せず再び淀んだ吐息を漏らした。

「アインズ・ウール・ゴウンも……もう終わりね」

私達を見捨てた「アインズ・ウール・ゴウン」など不快でしかない。しかし至高にして偉大なる死の王が望むとあれば、嫌な気持ちを保留し、主の命に笑顔で応えてきた。

だがそれも限界……いや、もう応えたくとも応えられないと言ったほうが早いだろうか。

ナザリック地下大墳墓は未だ健在だが、それも風前の灯火だろう。評議国を……世界の調律者^{ドラゴンロード}竜王によるナザリックとの交渉は決裂した。この世界を支配するナザリック、この世界の調律を維持する評議国。

世界の王は一人しか就けない以上、どちらかが席を譲らない限り決着はつかない。そんな話し合いが纏まるわけも無く、互いを頂点とすべく争いに火蓋が落とされた。

最初はナザリックが優勢だったが、ナザリックが得意とする陣形は籠城戦だ。攻め落とされることは絶対にならないが、それではナザリック地下大墳墓以上の領土を……世界を手にすることが出来ない。

五百年前、八欲王の手により多くの竜^{ドラゴンロード}王が殺されてきた。もう始祖の魔法の使い手はツアーを含めて片手で数える程度しか残っては居ない。いや、居なかったと言うべきだろう。

——奇跡だった。

かつて八欲王との戦いに参加せず身を隠してきた竜^{ドラゴンロード}王の一人に、復活の魔法を修めている竜が存在したのだ。

世界を穢した位階魔法とは違い、始祖の魔法で復活された竜は再び始祖の魔法を唱えることを可能とした。

勇敢に散っていった同胞達は姿を取り戻し、八欲王での教訓をバネに互いに協力することを誓った。もう二の足は踏まない。評議国は

法国と密を取り、互いが知りゆる限りの情報を共有した。当然ながら両国ともに力の全てを曝け出すことはなかったが、それでも「ぷれいやー」に繋がる情報からナザリックに関する情報まで多くを語ってきた。

その中に墳墓の情報も含まれた。復活した竜ドラゴンロード 王の一人が、八欲王が語る難攻不落のギルドを口にしたのだ。当時自分は知らないと答えたが、それで許してもらえはすもなく命を散らすこととなった。情報を元にナザリック包囲網が結成された。虎穴こけつに入らずんばとは言うが、勝てないと分かっている地獄の業火へと進むなどバカのすることだ。

閉じ籠ってくれるならそれで良いではないか。何の弊害も無いのだから。

だがナザリックは違った。この世界を——宝石箱を奪取すべく攻め入ることを決意したのだ。

——アインズは思った。NPC我が子達が負ける可能性があることは辛いが、それは死ではないと。

——アインズは思った。失敗は敗北ではない。最後に立っているのが我々ならそれで良いと。

——アインズは思った。

だが現実是非情である。

全てではないにしろ、ユグドラシルの一部を知るスレイン法国上層部もたらから齎された情報。

——えぬびーしーは死と同時に消失し、ぷれいやーであれば再び生を授けられる。

幾度と無く復活した八欲王を目にきた竜ドラゴンロード 王は考えた。ナザリックのえぬびーしーを確実に無力化する方法を。

それはもう激戦だった。戦闘に特化したシャルティアを筆頭にデミウルゴス指揮の元、ナザリック周囲を包囲する評議国・法国の者達に目に物見せる……はずだった。

倒さなければ良い。手足をもぎ、喉奥へと侵入した金棒は魔法の詠唱を封じた。《；伝言》；で助けを呼ぼうにも声を発することが出来なければ効果を成さない。

こちらの犠牲も多かったが、それでもナザリックからの軍勢は数を減らしてきた。

血の狂乱により全力を發揮した戦乙女の支配に成功したことも大きいだろう。傾城傾国ケイ・セイ・コウクでの支配に失敗した時は神の力が届かぬ領域に到達したのかと心底焦ったが、強大なマジック・アイテムを手放してからにはあっさりと操ることに成功した。件の洗脳により何らかの対策を講じていたのだろう。だが最後まで神の力から逃れることは叶わなかった。

先見の明を強化する始祖ワイルドマジックの魔法により脅威と見做みなされた彼女は自我を奪われ、ナザリックの仲間達を一人、また一人と瀕死にさせていったのだ。

こうなつては最早、為す術もないだろう。ナザリック地下大墳墓を捨て、トブの大森林に作られた第二のナザリックもNPC我が子達が居なければ意味を成さない。

切り札は確かに有る。確かにルベドを投下すれば戦況を覆せられる可能性は高い。だがそれは危険としか言えなかった。

今の状況でルベドを失えばナザリックを守りきれない。特殊な創られ方をしたルベドはワールドアイテムによる支配を逃れられるが、それでも王手を掛けられる訳にはいかない。

再びナザリックに静寂が訪れた。空っぽに近いナザリックは文字通り墳墓の様だった。



「モモンガ様と共になら……朽ち果てても後悔はないわね」

アルベドは瞳をとして、アインズと二人きりになった自分達の姿を瞼の裏に浮かべた。

だが現実には非情で、アインズは決してアルベドに惹かれることはない。アルベドがどれだけアインズのことを想おうと、NPCを失ったアインズの心を癒やすことも支えることも出来ない。

それはアルベドとて気づかないはずがない。アインズのことを誰よりも想うからこそ、今のアインズの気持ちが手に取るように理解できるのだ。

アルベドは鈴を軽く鳴らすと、程なくして扉が数度叩かれた。

ソファアーに腰掛けたまま対応しても良かったのだが、この部屋に他人を招くのは憚られる。床にはアインズ・ウール・ゴウンを象徴する旗生地が無造作に放置され、代わりとしてモモンガを象徴する旗が掲げられている。

アルベドは立ち上がり、自ら扉を開けた。

「ア、アルベド様!？」

扉の先には一人のメイドが驚きつつも畏まっていた。

本来であれば下の者が——この場合はメイドが——赴き、上の者はどかんと構えているべきだ。にも関わらずアルベドの方から近付いてきたことにメイドは疑問符を浮かべた。だが今のナザリツクは非常事態。少しでも時間が惜しいのだろうかと自己解決をする。

廊下に出たアルベドはそつと扉を閉めると、目の前のメイドに向かった。

「アインズ様は今、どちらにいらっしやるか分かるかしら？」

「はい。アインズ様はただ今お一人で執務室にいらっしやいます」

「そう……ありがとうございます」

アルベドに軽く一礼をし、メイドはその場を後にした。

メイドが居なくなっただことを確認した彼女は再び嘆息を漏らし、意を決したように《；伝言》・を唱えた。

「アインズ様、お時間を頂きたいのですがよろしいでしょうか？」



アインズは一人、執務室にて頂垂れていた。NPCが命をかけて戦

う姿は心を痛めるばかりだが、それでも唯一のギルドメンバーでありギルドマスターのアイズであれば金貨の許す限り復活させることが出来る。

ナザリツクは籠城戦に特化しており、拠点地に居る限り破られることは絶対に無い。だが守るだけでは勝利とは言えない。この世界を手にすることがアイズ・ウール・ゴウンの最終的な目標であるとなれば、籠城戦は敗北でしか無い。

このまま敵が包囲網を固め身動きが取れなくなっては元も子もない。この世界の強者とまだ見ぬプレイヤーが邂逅するやも知れない以上、敵に時間を許すことは負けを許すのと同義だ。

先ほど玉座の間でコンソールを確認したが、やはりシャルティア・ブラッドフォールンのみ文字が黒く染まっている。行方不明となつた他のNPC^{我が子}らは名前が白く書かれており、まだ倒されては居ないことが伺える。

空白になっていればまだ良かった。戻ってこないNPC^{我が子}らに再び生を授けることができるのだから。しかし敵に捕われ、身動きの取れなくなった状態では救うことが出来ない。未知の魔法を操る以上、ニグレドによる居場所の特定は危険でしかない。だからと言って無視するわけにもいかず、どうにかして救わねばと考えている。

考えてはいるのだが、肝心の戦力が不足している。八階層のあれらを動かせば打破できる可能性は高い。しかしNPC^{我が子}が帰る家がなければ傷ついた心を癒やすことは叶わない。第二第三のナザリツクへ隠れた所で、コンソールが表示されなければNPC^{我が子}を現世へと呼び戻せない。入り口を封鎖^{とぎ}し何人足りともナザリツク地下大墳墓への侵入を拒んでからの避難も悪くはない。

だがシステム「アリアドネ」が発動しないと確証が持てない以上は考えを保留としたほうが良いだろう。

「はあー、これじゃあ嘗てのメンバー達に顔向けができないよ」

両手で頭を抱える中、《；伝言》の魔法が届いた。見えない糸のような物が繋がった感覚を覚えると、アルベドの声が脳へと伝わってくる。

『アインズ様、お時間を頂きたいのですがよろしいでしょうか?』
一人で悩んでいても仕方がない。それはアルベドとしても同じことだろう。

「ああ、私も相談したいことがあるんだ。執務室にいるんだが……私から向かおうか?」

『アアア、アインズ様が!? そんな、いけません! お手を煩わせるなんてとんでもないです。私が今から向かいますわ』

「そうか。そうだよな。うむ、待っているぞ」

『では失礼いたします』

ふつんと糸が切れるように繋がりが解除され、アルベドとの会話が終了した。



「失礼します。アインズ様」

「誰だ?」

「アルベドと申します」

「入室を許可する」

「畏まりました」

扉が数度叩かれ、女性の声向けられた。声の主は当然知っている。しかし物事には順序があり、当然理由もある。

通常であれば当直のメイドがアインズを呼ぶのだが、アルベドが直接アインズを呼びかけた。支配者として慣れてきていると自負するアインズであったが、こういった細かい状況の違いまでは把握しきれない。

「ああ……アインズ様……いえ、モモンガ様。何時見てもお美しい。そして……」

アルベドが発している言葉がいまいち理解できないアインズは反応に困り、困惑した表情を——頭蓋骨のままだが——浮かべていた。
「完全不可知化。これで邪魔は入らないわね」

よほど重要な話があるのだろうか。ナザリックの智謀が一人は伊

達ではないと言ったところだろう。

「《；第10位階悪魔召還》；」

至極色のコールドールのような液体がコポリと音を立て床に染み出した。粘度の高いドロリとした溶液から一人の女性——サキユバス夢魔が現れた。

「モモンガ様ああああああ!!!」

不思議そうに召喚する様を見つめるアインズを他所に、アルベドは一つのリングを持ちながらアインズに飛び掛かった。

アインズの腕に装備させたリングは橈骨と尺骨を挟み込むようにすっぽりと包まれた。

「な、何事!? 何をするだアーツ!」

「もう……誰にも……誰にもモモンガ様は触れさせませんわ。サキユバス夢魔、頼んだわよ」

「畏まりましたあ」

男を……いや、女ですら魅了されかねない甘ったるい声で反応した。

「《；上位道具創造》；」

第二階層で以前見たとある器具を想像しながら呪文を唱えたアルベドは、創造した器具に跨がりサキユバス夢魔に両足を帯革で固定して貫った。

「意味がわからないぞアルベド! 一体何が始まるんだ!?!」
「……………」

微笑するのみで、その先を言わない。

アルベドが魔法で創った物の一つをサキユバス夢魔は手に取った。それはアルの嘴くちばしに似ており、銀色に光り輝いている。

するりと紐を解き、アルベドの思考を受け取ったサキユバス夢魔は手に取った下着を放心状態のアインズへと投げ放った。

「なっ……なんだ……この……落ち着くかほり香りは……そう、ベッドで疲れた体を落ち着かせるような……………」

アインズは知る由もないが、自室のベッドで穂の香に漂うその正体。それこそがアルベドから発せられたフェロモンだった。その昔、脇に挟んだリングをプロポーズとして渡す女性が居たように、自身の

生者とは別の理ことわりにより魂が現世へと繋ぎ止められ、仮初の肉体として覆おほっているのだ。

一時的に世界との接続を断絶し、片足を取り外した夢魔サキユバス。ぽっかりと開かれた秘境へと進むと、入り口に合わせ片足が小さく縮んで行った。傷つけないようにゆっくりと、慎重に奥へと運び、小部屋へ辿り着くと逆向きに成るように片足を配置した。

一つ、また一つと骨を取り外し両脚が小部屋で形を成した。

夢魔は腕を止めない。休むことなく仕事を続け、最後に頭部を小部屋へと収め全身を完成させる。

胸元で輝く神の如き珠は、途中アインズの肋骨に付与されるように小部屋の本体へと合流を果たした。

未だに荒い吐息を漏らすアルベドは小部屋を拡げるバネのような物と、アヒルの嘴くちばしに似た物を頭の中で用済みだと思考する。役目を終えたその二つは光となり消え去った。

夢魔サキユバスに帯革を外してもらい、千鳥足となりながら両足を地につけた。

時間経過とともに契約は解除され、夢魔サキユバスはその姿を消した。



アインズはもう……どうでもよかった。なにかもが皆懐かしい。どう足掻こうと仲間たちには会えない。こんなにもアインズ・ウル・ゴウンの名が轟とどろいても、NPC我が子らを救わんと動き出す存在は一向に現れない。

分かっていたつもりだった。頭では理解できるそれは、心で必至に否定を続けている。それを認めてしまうことが何よりも怖い。

アルベドの理解し難い行為など最早どうでもよかった。身を任せたアインズは、その体を落ち着かせる母なる大地へと心を休め、眼窩がんかに宿した赤き光はすうっと吸い込まれるように消え、アインズは眠るように意識を閉ざした。



慈悲のある笑顔でアルベドは膨れ上がったお腹を擦り、ギルドメンバー捜索で知ったある場所に向けて魔法を唱えた。

「𳀊；転移門𳀋；」

アインズから非常時に使うようにと、渡された巻物スクロールを消費することで現れた門の先には深い青が広がっていた。

深い呼吸を数回繰り返し、意を決したアルベドは重い足取りを進めた。

海上へと投げ出され、重力に身を任せた肉体はそのまま水中へと飛び込んだ。太陽の光により透き通る青さだった一面は次第に暗い青——紺碧こんぺきへと色を変え、最後は光すら通さない闇夜より深い黒へと変化した。

力を開放し、ただただ沈みゆく肉体を自然に託している。アルベドは本来であれば呼吸を必要としない。反射的に息を吸ってはいるが、吸わないからといって死ぬことはない。

「これで……これでやっと、二人きりになれましたね」

マリアナ海溝よりも奥底——この世界の深淵へと降り立ったアルベドは体を丸め、眠るように瞳を閉じた。